結跏趺坐する仏像の印相The Arm Position/Mudra

色界の壁がんには432の空間に「釈迦牟尼仏」と呼ばれている仏陀が安置されている。寺院の第1回廊から第4回廊までの全側面に異なった印を結ぶ釈迦牟尼仏があり、この形態を「ムードゥラ」（印相）という。

仏像絵	印相	象徴する意味	釈迦牟尼仏	方向	仏像の位置
	触地印	悪魔を払う	阿しゅく仏	東	色界
	施与印	何でも願いをかなえてくれる	宝生仏	南	色界
	禅定印	瞑想中	阿弥陀仏	西	色界
	施無畏印	人々から恐れを取り除いてくれる	不空成就仏	北	色界
	説法印	仏陀が説法している	毘盧舎那仏	東西南北全面	色界
	転法輪印	チャクラを両手で回している	釈迦牟尼仏	ストゥーパの中	無色界

ボロブドゥール寺院遺跡観光公園案内図

1. ボロブドゥールの学びの中枢マノハラ
2. ボロブドゥール遺産保存事務所
3. 公園運営事務所
4. 案内所
5. トイレ
6. 入場券発券事務所
7. お土産販売所
8. 駐車発券機
9. 駐車場
10. バス駐車場
11. レストラン
12. 祈祷室
13. 考古学博物館
14. サムドゥララクサ船舶博物館
15. 保全事務所
16. 植栽事務所
17. 象アトラクション
18. ダギ丘陵
19. アクソビヤ園
20. ルンビニ園
21. グナダルマ園
22. アート＆ギフトマーケット
23. 休憩区域
24. パドマ園
25. 野外舞台

PT. TAMAN WISATA CANDI
BOROBUDUR, PRAMBANAN & RATU BOKO [PERSERO]
Jl. Raya Yogya - Solo Km 16, Prambanan,
Yogyakarta 55571 - INDONESIA
Tel. +62 274 496 402, Fax. +62 274 496 404
corporate @borobudurpark.co.id

BOROBUDUR AMT
Tel. +62 293 788 266
Fax. +62 293 788 132
borobudur@borobudurpark.co.id
CALL CENTER : (024) 8646 2345

SMS ZENTRUM 0815 0100 0900

Borobudur

www.borobudurpark.co.id

ボロブドゥールBorobudur

ボロブドゥール寺院は丘陵の上に、200万個以上の安山岩を用いた階段状ピラミッド形に建造されている。遠くから見ると、半球形のストゥーパ（卒塔婆）を思わせ、近づくと2つの物体、あるいは1個の建造物に見える。円形3層のストゥーパ形状の上部建造物はインド建築様式。一方、方形６層のピラミッド型多角形を成す下部建造物はジャワ建築が融合した建築。上部と下部構造は一体であり、ひとつのストゥーパを具現している。

ボロブドゥール寺院のストゥーパは宇宙を反映する仏教概念が取り入れられている。ボロブドゥール寺院の内部には空間が無く、寺院の回廊を時計回りに巡り、理解しながら最高部のストゥーパへ至る。この回り方はプラダッシナ（サンスクリット語、尊者のまわりを右回りにめぐること）と言い、仏教の教えでは「寺院に存在する諸霊に敬意を払う」を意味する。

ボロブドゥール寺院を大乗仏教のレプリカと観ると、宇宙は３界に分けられる。

- 第１の部分はカマダトゥ（俗界）で、煩悩に満ちた世界を表し、旧基壇に示される。
- 第２の部分はルパダトゥ（色界）で、煩悩を超越したものの、まだ形態にとらわれている世界を象徴する。現基壇から第４回廊までの方形の５層に示される。
- 第３の部分はアルパダトゥ（無色界）で、３つの円壇にあるストゥーパとその内部の仏像涅槃で解脱の境地を象徴している。

カマダトゥ　ルパダトゥ　アルパダトゥ

修復

12〜14世紀に生じた自然災害により、ジャワ王国の勢力の中心地がジャワ島東部へ移り、ボロブドゥール寺院は葬り去られた。勢力移行の理由は明らかでないが、度重なるムラピ山の噴火で人々が噴火を遠ざけて移動したと考えられている。

18世紀にジャワ人がボロブドゥール寺院に戻ったことを示す写本が見つかっている。当時ジャワを統治していた英国副総督スタンフォード・ラッフルズ卿の指揮下で1814年ボロブドゥール寺院の発掘が着手された。

1815年ラッフルズは200名の作業員を動員し、45日間にわたり寺院周辺の樹木を伐採し、寺院を汚していた土と埃を取り除かせると、清掃した寺院周辺の大部分が地表に姿を現わした。

文書記録やレリーフの解読などの活動が続行され、1885年イツェルマンの作業中、寺院の基壇の隠れたレリーフが発見された。これらの隠れたレリーフには古代ジャワ語であるカウィ語が見られ、文字がはっきりしていたので寺院の建立年代が9世紀中頃のシャイレンドラ王朝時代と断定された。

石工がサンスクリット語で記した指南書のうち、いくつかの面は未完のままだったが、刻字様式が極めてはっきりしていたので、9世紀中頃に遡れる。

1907年大規模な修復工事がオランダ国軍技術将校ファン・エルプの指揮下で行われ、1911年に完了した。この工事は意味があり、しばらくの間は確かに寺院を保護したが、寺院の部分部分の多くは修復中に元の状態に戻されなかった。

1956年寺院の別件事前調査がユネスコから派遣されたベルギー人専門家によって実施された。事前調査によると水害が深刻であり、寺院を長期間持ちこたえるにはすぐにその害を食い止めるべきだと、結論された。寺院下方の丘陵は風化し、基盤は弱体化し、レリーフは腐食していた。

1963年修復下調べが始まり、丘陵は想定されていたような自然の丘ではなく、丘陵周辺は石と石塊が混じったローム土壌だったことが分かった。寺院の建築構造の関する初期調査後、修復作業は大規模になるだろうと見積もられ、インドネシア政府はボロブドゥール寺院修復の必要性を訴える動議を1968年ユネスコに提出した。

ユネスコは全面援助し、修復基金を募った。1968年から1983年までユネスコの下で修復現地調査および抜本的な大修理事業が行われた。世界中から専門家が集まり、解体および元の位置への再設計を援助した。腐食した石を微生物から防ぐあらゆる方法に莫大な労力がつぎ込まれた。

ユネスコは1991年ボロブドゥール寺院を世界文化遺産に登録した。

シナモンルート

1982年フィリップ・ビーレという名の21歳の英国青年が、寺院を飾るレリーフを学ぶためにボロブドゥール寺院に上がった。彼はかつて英国海軍に勤務しており、伝統的な船舶と海洋の伝統を学ぶためにインドネシアに滞在した。船舶にまつわる10のレリーフ面を見つけ、あるものは櫂付き、あるものは風を切る斜め長方形の帆がある3本マストが付いた船だった。英国青年はボロブドゥール寺院に描かれた船は、数世紀も前にインドネシアとアフリカを結んだ名高い航路の一部だったのではないかと推論した。

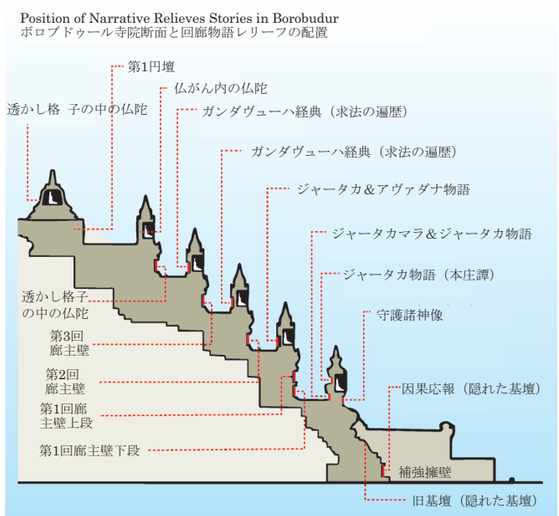
危険なシナモン航路はインドネシアの海域からインド洋を横切り、セイシェル、マダガスカル、さらに南アフリカ、ガーナまで結んでいる。このルートの最初100年の主交易は、その時代に超高価値だったスパイス（香辛料）だった。

インドネシアの造船と船の乗組員の腕前に驚愕し、興味津々のフィリップ・ビーレは元来のルートをたどる伝統船舶を建造するプロジェクトを立ち上げた。この船はボロブドゥール考古園内にあるボロブドゥール船舶博物館内の特別スペースに収蔵されている。

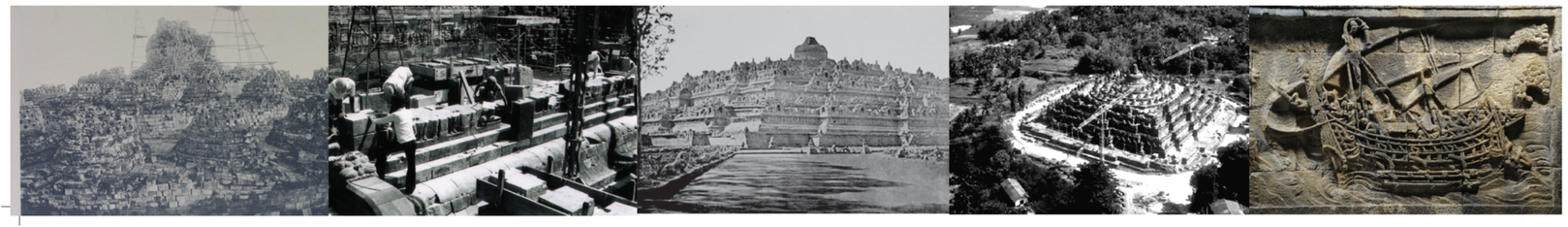
ラリタヴィスタラ経典

上部色界にはゴータマ・ブッダの生涯を描いた壁レリーフがある。このレリーフはラリタヴィスタラ経典と呼ばれ、ルンビニ園（現在ネパール）でのシッダルタ皇子の誕生から　始まるゴータマ・ブッダの生涯の伝説を物語っている。彼の母親はマヤ・デウィといい、息子を産んだ1週間後に亡くなりました。

成人した後、シッダルタ皇子はプトゥリ・ゴパという名の王女と結婚。宮殿の外へ出た旅で皇子は今まで見たこともなかった珍しい事象に出くわしました。これらの事象とは病を患った盲目の老人、死人と僧侶でした。これらの事象を見た皇子は宮殿を去り、苦行者を始めました。



皇子が苦行者だった時、ブラマパニ、リドゥラカ、アラダ・カパラなど何人かの高名な師や5人の有名な隠者の弟子になりました。師の教えに満足せず、遂にシッダルタ皇子はインドのボッダガヤの町にある菩提樹の下で苦行を行いました。そこで広範な知識を得て菩薩になり、シッダルタ皇子は名前を「ゴータマ・ブッダ」に改名。

寺院上部には直径16.2m、高さ12.8mの無界の母ストゥーパがある。ファン・エルプによる最初の修復時にこの母ストゥーパを発見。この彫像の構成は他の彫像と極めて異なり、この彫像制作の目的は至高の無形の表現ではないかと推測される。この彫像はアディ・ブッダ（本初仏）と呼ばれ、現在ボロブドゥール寺院公園内にある博物館で見られる。

ボロブドゥール寺院には24の入り口があり、母ストゥーパへ通じる方形層の各側面には6つの入り口門がある。基壇上にある入り口の装飾は元のままでなく、頭部分だけが残るのみ。第4門の形は同一で、この入り口は天国への「ダシャット（畏怖／畏敬の意）」の入り口と呼ばれている。